

映画時評

新作

私的な素敵なシネマ2020

井上静夫 同人誌主宰

2020年は映画界にとってもコロナの年、激動の年だった。きっと歴史に刻まれる年になるだろう。

緊急事態宣言が出されると映画館は休館となり、米ハリウッドの大作映画の公開も延期になるなど、厳しい状況が続いた。さらにミニシアターは閉館の危機にまでさらされ、ミニシアター・エイド基金によって今のところ何とか生き延びることができている。もちろん観客側も自粛要請、STAY HOMEによって映画を観ることを制約された。筆者も自粛期間中はおろか、その後も影響を受け、コロナ禍になって厳選して観ざるをえない状況になった。それ故、本来なら本稿にあげるべき作品が何本か、抜け落ちてしまっていることも十分想定される。ご容赦願いたい。

このような状況にあってもなお、強烈な個性を放つ作品を多数観られたことにまずは感謝したい。

そんなわけで例年とはずいぶん違う映画環境にはなった

が、それでも筆者が2020年に劇場公開されて観た映画を総括するとともに、私的なお気に入り作品についてご案内してみようと思う。

〈洋画〉

- ① 『異端の鳥』(ヴァーツラフ・マルホウル チェコ・スロバキア・ウクライナ)
- ② 『ヴィタリナ』(ペドロ・コスタ ポルトガル)
- ③ 『新しい街 ヴィルヌーヴ』(フェリックス・デュフルーラベリエール カナダ)
- ④ 『ホモサピエンスの涙』(ロイ・アンダーソン スウェーデン・ドイツ・ノルウェー)
- ⑤ 『マロナの幻想的な物語り』(アンカ・ダミアン ルーマニア・フランス・ベルギー)
- ⑥ 『死霊魂』(ワン・ビン フランス・スイス)
- ⑦ 『オリ・マキの人生で最も幸せな日』(ユホ・クオスマネン フィンランド・ドイツ・スウェーデン)
- ⑧ 『あなたの顔』(ツアイ・ミンリヤン 台湾)
- ⑨ 『はちどり』(キム・ボラ 韓国・アメリカ)
- ⑩ 『パラサイト 半地下の家族』(ポン・ジュノ 韓国)

〈邦画〉

- ① 『つつんでひらいて』（広瀬奈々子）
 - ② 『スパイの妻』（黒澤清）
 - ③ 『劇場版』GON THE LITTLE FOX』（八代健志）
 - ④ 『れいわ一揆』（原一男）
 - ⑤ 『燕 Yan』（今村圭佑）
- （注） カッコ内は監督名と制作国（洋画のみ）

洋画ではこのほか『コロンバス』『ホドロフスキーのサイコマジック』『タッチ・ミー・ノット』『ローラと秘密のカウンセリング』『シリアにて』『娘は戦場で生まれた』『鷺鳥湖の夜』『ようこそ映画音響の世界へ』『その手に触れるまで』『馬三家からの手紙』などがあげられる。

邦画でもこのほか『ドロステのはてで僕ら』『朝が来る』『MOTHER マザー』『iー新聞記者ドキュメント』『おらおらでひとりいぐも』『アンダードッグ』『三島由紀夫VS東大全共闘 50年目の真実』などがあげられる。

洋画のラインナップを見てみると、劇映画のほかにドキュメンタリーもアニメーションもあって、比較的バランスのいい作品群になった。制作国についてもチェコ、ウクラ

イナ、ポルトガル、ルーマニア、そしてフィンランドとバラエティーに富んでいるが、一方で『死霊魂』のように自国を制作国にできないという現実があることにも注目しなければならぬ。監督についても定評ある実力派を中心に、新しい才能も見ることができたことは幸いである。

コロナ禍で米ハリウッド大作の公開見通しが立ちにくくなか、2020年は邦画が気を吐いた。国内興行収入1位となった『鬼滅の刃』一色で、いいところを全部持っていたかた感もあるが、筆者としてはコロナ禍の状況下においても、地味ではあるがさまざまなお気に入りの作品を観ることができてよかったと思っている。例年になくドキュメンタリーやアニメーションががんばっていたのもうれしい。さて、2020年の洋画は、まずモノクロ映画ががんばった。ラインナップの中では『異端の鳥』や『ヴィタリナ』『オリ・マキの人生で最も幸せな日』がこれにあたる。『異端の鳥』は、美しいモノクローム映像が残忍なシーンを凌駕する、いわば残酷ファンタジーとでもいう作品で、観ている間、異世界に迷い込んだようだった。暴力のリアル、構図（アングル）のすばらしさ、光と影、遠近感、加えてハンパない緊張感が前頭葉を刺激する。『ヴィタリナ』もまた、どのシーン、どのカットも美しく、うっとりするほど

であるが、内容はうっとりどころか、移民労働者問題を描き、リアルそのものである。深い闇の中で微かにまばゆい光を放つような作品で、ヴィタリナ役の存在感が際立っていた。

この2本は同時にアートのような作品でもあるのだが、アート系といえば、『ホモサピエンスの涙』もまた、動く絵画のような作品である。構図、色彩、美術……細部に至るまでこだわって、人々の悲喜こもごもを肯定も否定もなく、ユーモアを含めて撮っている。映画とはつくづく映像なのだと思ひ知る作品だった。

2020年の洋画は、アニメーションががんばった。アート性の高い作品は実写だけに限らない。『新しい街 ヴィルヌーヴ』は、墨のみで描かれた美しいモノクロームアニメーション。省略された背景と余白の、白い映画といえる作品は、ときに饒舌、ときに静謐で詩的。イメージーションを喚起する唯一無比のアニメーションだった。『マロナの幻想的な物語り』は逆に色彩豊かなアニメーション。クレヨン画を動かしているような映像の自由度は高く、色彩とタッチはほとんどアートである。

2020年の洋画は、ドキュメンタリーががんばった。『死霊魂』は中国反右派闘争の生存者たちの証言を、黙禱

を捧げるかのようにじっくり撮った作品。8時間越えのドキュメンタリーは観る者もがんばらないといけない。そして、これと同じような作品に『あなたの顔』がある。台北に暮らす13人の人たちの顔と向き合う映画。緊張感と平穏な空気がないまぜになったような不思議な作品。多くを語らず人生を語る。それは13人の人たちの顔に深く刻まれたシワのせいなのかもしれないと思わせる。その他、『ホドロフスキーのサイコマジック』『タッチ・ミー・ノット・ローラと秘密のカウンセリング』も印象深い作品だった。

2020年の洋画は、エンターテインメントもがんばった。話題作の『パラサイト 半地下の家族』は、映画のおもしろさを全部詰め込んだ、とにかく楽しめるエンターテインメント作品であるが、同時にしっかり社会派してるのも特筆すべきだ。同じ韓国映画でも『はちどり』はこれとは様相を異にする作品で、1944年の韓国社会を背景に中学2年の女の子を静かに、繊細に、あおあおと撮っている。

2020年は邦画でもドキュメンタリーが目立っていた。『つつんでひらいて』は紙の本にこだわり、紙と文字を触りながら手作業するブックデザイナーの菊地信義を追う静かな作品である。「装幀は肉体だ」と菊地は言う。ならば本

文は精神、あるいは魂か。ともあれ、紙の本はすばらしい……この一点で撮った映画である。一方、『れいわ一揆』は、これとは真逆ともいえる映画。れいわ新選組から参院選に立候補した東大教授にして女性装家の安富歩を選挙期間中、追いかける作品である。そこから見えてくる日本の風景を面白おかしく切り取ってゆく。そのほか『i-新聞記者ドキュメント』は一新聞記者の望月衣塑子をひたすら追いかけるし、『三島由紀夫VS東大全共闘 50年目の真実』は三島由紀夫を追いかける。3本とも政治色というよりも、対象者自体の魅力、映画としてのおもしろさを狙っているのが共通している。

『スパイの妻』は、ベネチア映画祭銀獅子賞受賞の作品。エンターテインメントにして映像の外側まで想起させる巧みな映画作り。サスペンスフルな展開と演劇的な要素を持ちながら映画的映画を形成している。太平洋戦争前夜の空気がディテールに凝ってうまく表現されていた。

そして、邦画のアニメーションは、2020年、空前のヒットとなった『鬼滅の刃』……ではなく、『劇場版「こんゴンの THE LITTLE FOX」』これは、新見南吉の童話の「こんぎつね」をストップモーションアニメーションという手法でいいねいに作りあげた作品である。子供向けと侮ってはいけ

ない。日本の情感、風景描写がすばらしい。ただ、アニメーション作品は多数公開されているがお気に入りがこの1本だけというのが少しさみしい。

映像に注目すべき作品として『燕 Yan』もあげられる。台湾人の母と日本人の父を持つ兄弟のそれぞれのアイデンティティを描く作品であるが、カメラワークと映像が冴えていて、少ないセリフを映像の力で補っている。この監督はこれが長編第1作らしいが、今後に期待したい。

以上が2020年の映画である。観たかった作品が観られず不完全燃焼に終わった一方で、ラインナップを見たところにおりすばらしい作品にも出会え、こうしてご案内できたことに感謝しなければならぬ。

2020年がよもやこんな年になるとは年当初には予想さえしなかったように、2021年がどんな年になり、どんな映画が観られるのかわからないが、素敵な作品に巡り合って、またみなさんにご案内できることを願ってやまない。

女性たちの声

村上 暁 スタッフ

2017年10月、ハリウッドの大物プロデューサーが長年にわたってセクシャルハラスメントを行っていたことを、ニューヨークタイムスが報じた。このことをきっかけに、セクハラを受けた女性たちによる「#MeToo」運動が大きく展開される。プロデューサーのほかにも、人気番組のキャスター、俳優、コメディアンなどが、過去のセクハラ行為を訴えられた。数々の告発記事により、権力を持つ男性による陰湿なセクシャルハラスメントが明らかにされた。職場でのセクハラだけでなく、家庭、地域などでのジェンダーハラスメントに対しても、声が上がられ始めた。映画の世界は、まさに「男らしさ」「女らしさ」であふれていたが、近年はそうしたジェンダーバイアスの押し付けを見直す作品が増えている。

普段の自分は中年男、いわゆる「おじさん」として生きているが、映画を観ることで女性当事者としての人生を生きていくことができる。女性たちの声突き刺さってくる、そんな映画を紹介したい。

『スキヤンダル』

2019年 米・加国 ジェイ・ローチ監督

テレビ局の会長から受けたセクシャルハラスメントを訴えた女性たちの物語。この映画の製作発表は2017年5月なので、「#MeToo」運動が起こるより前から企画は動いていたようだ。

主演の一人シャーリーズ・セロンはプロデューサーも兼ねていて、映画にかけの意気込みが伝わってくる。脚本は『マネー・ショート』のチャールズ・ランドルフ。今回も深刻になりそうなテーマを、明るくポップにユーモラスに描いている。

セクハラ被害者である女性の痛みが、セリフや表情を通して痛切に伝わってくる。メインキャスターの座を得るために、「男に媚を売ってきたではないか」という女性職員の声。セクハラは権力を振りかざす男vs従うしかない女という構図になりそうだが、「本当に恐ろしいのは被害の恐ろしさに気づかない女性」というセリフがとても印象的だった。パンフレットの小川たまかさんのコラムでも、そのことが取り上げられている。女性の被害者だけが非難される原因。男たちが支配する社会で、そのように洗脳されてきているのではないか。小川さんの激しい怒りが伝わってくる。

『Swallow スワロウ』

2019年 米・仏国 カロ・ミラベラレディヴィス監督

主人公ハンターは金持ちの息子と結婚し、一見幸せそうに見えるが、貧しい生まれの彼女は引け目を感じている。夫は「仕事ができる自分が妻を養ってやっている」という意識が丸見えで、ハンターは孤独な気持を抱えている。

スリラー要素のある映画だが、本質は専業主婦であるハンターの生きづらさを描いた人間ドラマだ。夫に隠さなければならぬ出生の秘密、妊娠による体調の変化などのプレッシャーによって、ハンターは一気に精神のバランスを崩し異食症になってしまう。異食症は、彼女を孤独にしておいた周りへのメッセージだ。

発症した後、夫家族が見事なほど裏目の対策を講じ、主人公を追い詰めてゆく。「貧しく弱く何もできない妻を助けてやる」という考えから抜け出せないからだ。行き場所をなくした主人公を逃がしてくれるのは、シリアから難民として逃げてきた看護師の男性。痛みを抱えたものしか、他人の痛みを感じることはできない。ハンターは夫から逃げ、自分のトラウマと対峙する。主人公の勇氣ある行動、ラストシーンに少しばかり希望を持つことができた。

『おしえて！ドクター・ルース』

2019年 米国 ライアン・ホワイト監督

アメリカのセックスセラピスト、ルース・ウエストハイマーさん（92歳！）を追ったドキュメンタリー。ドイツ系ユダヤ人で第二次世界大戦を生き残ったという過酷な過去を乗り越えて、アメリカで有名なセラピストになるまでの波乱万丈な人生。「彼女に勇氣をもらった、救われた」という多くの声は、本当に感動的。中絶、エイズ、LGBTなど、どんなことでも常に弱い人の立場に立った言動が、人々を勇氣付けてきた理由だろう。考えてみると、こんな人は日本には一人もいないというほどの稀有な存在だ。

セックスについて男性が女性に対して持っている様々な勘違い。この映画は多くのことを教えてくれる。以前から、昭和のおじさん脳で作られた邦画に登場する女性に違和感を持つていたが、それはやはりおじさんが考えている女性像が全く嘘っぱちであることが原因であると分かった。

パンフレットの峰なゆかさんのコラムが素晴らしくおもしろい。「私には口があって、話し合うことができる。言う権利を絶やしてはいけない」。ドクター・ルースの役目を、日本で果たしてくれることを期待したい。

『ある女優の不在』

2018年 イラン ジャファール・パナヒ監督

主人公は、映画の世界にあらがれ女優になりたいと願う少女。努力の末テヘランの芸術大学に合格したが、芸術と女性を軽視する村で孤立し夢を絶たれる。助けを求める動画を送られた人気女優と映画監督が、少女の村へ向かう。

さすがパナヒ監督、やたらと長いワンカットのシーンがあったと思えば、クライマックスになりそうな場面はあつけなくカットされていたり、一筋縄ではいかない。全編を通して感じられるのは、「男らしさ、女らしさ」を強要する社会に対するパナヒ監督の厳しい視線だ。

割礼を行なった後の包皮をどこに埋めるかということにやたらとこだわる老人。自分の牛を精力絶倫だと言ってやたらと自慢するおっさん。どうでもいいことを延々と話す滑稽な男たち。田舎のこの村の男たちは、常に女よりも男が上位に立っていないと不安らしい。自分たちより頭がよく、高い教育を受ける女の存在を認めたくないのだ。なぜなら、それは自分の無能を暴かれることにつながるから。画面を通して、そんな男たちの姿が浮き彫りになる。

英題は「3FACES」。邦題「ある女優の不在」というタイトルの意味は、イラン映画界の事情をも含んでいる。

『パピチャ 未来へのランウェイ』

2019年 アルジェリア他 ムニア・メドゥール監督

1990年代、内戦下のアルジェリアが舞台。ファツシヨンデザイナーになる夢を持つ女子大生ネジユマが、男中心社会&イスラム原理主義と戦う物語。

パワーに溢れ、力強く迫ってくる映画に圧倒された。「パピチャ」というのは、アルジェリアのスラングで、常識にとられない自由な女性のこと。ネジユマはまさに「パピチャ」で、不自由と暴力にあふれた社会を生き生きと自分らしく生きていく。物語の終盤に悲惨な事件も起こるけど、それでも立ち上がるパピチャたち。ラストはネジユマたちにとつて希望のある未来が待っていることが予感でき、とても感動的だった。

ネジユマたちが同年代の男の子たちとドライブをしているとき、女性はおとなしい服を着るべきだ言われる。日本でも、性的暴行を告発した女性に対して「そんな服を着ているからレイプされるのも仕方がない」と言う人間が必ずいる。ヤフコメはいつもそんなネトウヨ主張でいっぱいだ。ジェンダーギャップ指数は、153ヶ国中アルジェリアは132位、日本は121位ということだ。

『ママをやめてもいいですか!?!』

2020年 日本 豪田トモ監督

育児に奮闘するママたちを追ったドキュメンタリー。といっても、この映画はポップな音楽や子供達の笑顔にあふれていて、堅苦しくならず楽しめる。大泉洋のナレーションもぴったり。

予想はしていたけど、途中からパパたちへの耳の痛い意見も飛び出す。自分もさんざん言われてきた「お父さんは会社へ行ってる間だけ仕事してればいいんだから、楽でいいわね」。有休もなく、365日、24時間育児をしているママたちに対して、返す言葉がありません。「パパたちももっと早く帰れる社会にするべきだ」というママたちの想いは、社会全体が重く捉えるべきことであると感じた。

「ママをやめる」、一見ドキッとすると子供たちへの愛情がないとかそういうことではない。女性だけに子育てを押し付けてきた社会、彼女たちを追い込んでいる社会に対する、女性たちの心からの叫びである。

出産シーンと5年生の娘を抱きしめるシーンに感動。笑って泣いて、勉強になってという素敵な映画でした。

『私をくいとめて』

2020年 日本 大九明子監督

31歳独身女性が脳内のAと会話をするという設定。大九監督の前作『勝手に震えてる』も同じような設定だったが、前作は主人公があまりにもオタクすぎて物語に入り込めず、いまひとつ楽しめなかった。今回の『私をくいとめて』の主人公はごく普通の女性会社員。のんの自然体の演技も手伝って、自然と物語に引き込まれた。

主人公みつ子は、お気楽に暮らしているように見えるが、過去のつらい経験から、男に対する不信感を抱えている。関係が成熟する前に性行為を迫られることが、女性にとってどれだけ大きな恐怖となつてその後の人生に影響するか。女性お笑い芸人が客に絡まれるのを見たときに、「そんなことはやめろ」と言えずに自己嫌悪に陥るシーン。雪の車中、付き合い始めたばかりの彼氏がイラつくのを見ておびえるシーン、ホテルで彼氏に触れられた時に思わず逃げ出ししまうシーン。怒り、恐れ、不安などが、のんの素晴らしい演技によりダイレクトに伝わる。日常的に見かけるようなシーンで、嫌な思いをする女性がいる。男である自分も、言葉では表現しきれないような複雑な思いを抱かされた。

『82年生まれ、キム・ジヨン』

2019年 韓国 キム・ドヨン監督

韓国でベストセラーとなった小説の映画化。「キム・ジヨン」という名前は、1982年ごろに生まれた女の子でも多い名前とのこと。

子育て中の主婦ジョンが、精神的な病気になる。子育ての大変さに理解を示さない周りの人々が、彼女を追い詰める。夫、夫の親族、夫の職場の人々、ジョンの親族、ジョンの元職場の人々等。男兄弟より優秀でも、進学費は男兄弟に優先して使われる。同期で一番優秀でも、出世は男性が優先される。社内でトイレの覗き事件が発覚しても、犯人の男たちにはおとがめなし。夫より優秀でも、子供ができるとキャリアを放棄させられる。祝祭時に夫の家で義母とともにごちそうを作らされる、自分の実家でも祝祭をしているのに。等々。

男中心の社会で、いかに女性が生きづらい思いをしているかを示すような、細かなメッセージがたくさん散りばめられている。自分も発していた何気ない言葉や行動、態度。第三者として映画を見ることで、多くの気づきがあった。

原作の小説は、韓国で社会現象になるほどの影響があっ

たとのこと。多くの女性の共感を得た反面、男性からは大バッシングを受けたそう。映画は原作より若干マイルドになっている印象のため、小説のファンからはかなり批判もあった。パンフレットに山内マリコさんのレビューが載っていて、その辺りのことも書いてある。「原作を愛する我々には物足りない感じがするけれど、そこはぐっとこらえて映画を応援しよう」というコメントがとても感動的だった。

昨年は、アメリカ連邦最高裁判事のルース・ベイダー・ギンズバーグさんが亡くなった。ドキュメンタリー映画『RBG 最強の85歳』がテレビで放映され、女性差別と闘ってきた彼女の功績が改めて見直されている。自伝的映画『ベリーブ 未来への大逆転』と合わせて必見の映画だ。女性たちにとってより生きやすい社会になるために、映画は大きな力になると信じている。

と結ぼうとしたら、オリンピック組織委員会会長の森喜朗氏の女性蔑視発言ニュースが入ってきた。このような人物を、世界が注目する大会のトップに担ぎ上げていたとは：さすがジェンダーギャップ指数121位のことだけはあ。恥ずかしい国だね、日本。

旧作

『太白山脈（テベクサンメク）』安井廣之 クリニック院長

一九九四年韓国 林權澤（イム・グオンテク）

「反日の根源を考える」

「恨」（ハン）

「サッカーの国際試合で日本と北朝鮮が対戦したら、どちらを応援しますか」と韓国人に尋ねると、返ってくる答えはまず間違いなく「北朝鮮」である。

一九五〇年に始まり五三年に休戦した南北朝鮮の戦いで死者は約五百万人といわれている。この数は太平洋戦争における日本人死者数三一〇万を軽く上回る。報復には報復をと同胞同士が殺し合い、これだけ多くの犠牲者を出したのだ。分断されたまま膠着状態となって休戦した南北であるが、韓国人の北に対する憎しみは少ない。

それに引きかえ、韓国人は日本に対し特殊な感情をいだいているようだ。心の奥深いところに、しこりとなった「恨」（ハン）が生き続けているらしいのだ。この「恨」は秀吉の朝鮮侵攻のときから続いているとの説もあるのだが、も

しそうだとしたら、文禄・慶長の役の四百年余り後に生きる我々現代日本人としては、責任の取りようもない。

ところで、「日帝」という漢字語は韓国語では「イルジェ」と発音し、「大日本帝国」または「日本帝国主義」を意味する。そして「日王」は「イルワン」と発音し、日本国天皇を指す。「天皇」という言葉は韓国では使われない。前掲の二語は、韓国人なら誰でも知っている。教科書で習うからである。また、「親日派」（チニルパ）という慣用語があり、これは植民地時代に日本に協力して財をなしたり地位を築いた人たちを指す。日本に親近感を持つ人を意味する言葉ではない。現代の日本人には考えられないことだが、文在寅（ムン・ジェイン）政権下では、植民地支配が終わって七六年経つ今でも親日派狩りがおこなわれている。

こじれる日韓関係

日韓関係がまたしてもこじれている。日本では解決済みとされている徴用工と慰安婦の問題が韓国で蒸し返され、両国の関係が最悪ともいえる状態になっているのだ。

一九六五年の日韓基本条約で「請求権に関する問題が完全かつ最終的に解決されたこととなることを確認する」と規定し、慰安婦問題に関しては二〇一五年に両国政府間で

「最終的かつ不可逆的に解決されることを確認した」と宣言されたことはまだ記憶に新しい。

にもかかわらず、韓国は同じ問題を持ち出して、またしても日本に謝罪と補償を求めようとしている。腹立たしく思う日本人は、おそらく私だけではあるまい。ところが、「韓国は日本に対する敵意に満ちている」と思い込み、腹をくくって韓国を旅すると、どんな田舎に行っても人々は親切かつにこやかで、危険を感じることはまずない。報道されていることと現実の落差は大きい。

韓国の大統領は政権末期に権力が衰えると「反日」を唱え、ある程度は影響力を回復する。それだけ「反日」のスローガンは呪力を持っている。こんなことがいつまで続くのだろうか。

日本は一八七六年に武力で朝鮮王朝を脅し、江華島条約を強要して門戸をこじ開けた。また一八九四年の東学農民蜂起をきっかけに、日本は朝鮮に兵力を投入してこれを制圧、王宮を占拠するなどした。そして日清戦争で朝鮮の宗主国清を破ったのち、太平洋岸に不凍港を求めて南下するロシアとも戦って一九〇五年に勝利した。この年、日本は朝鮮に乙巳条約を押しつけ、保護国とした。

さらに日本は一九一〇年に朝鮮を併合、一九四五年の敗

戦により半島から撤退するまで、三六年間植民地として支配した。韓国人は日本からの解放を「光復」（クワンボク）と呼ぶ。祖国の主権回復を歓ぶ言葉である。

改めていうまでもないが、日本による朝鮮併合は徹頭徹尾武力によるものであった。このことに関しては、いかなる弁明も通用しない。

日本の敗戦によって朝鮮は解放された。しかし、この解放は自力で闘い取った独立でなかったため、悲惨な結果を招くことになった。米ソ二大国がはいり込み、その思惑で半島が南北に分断されて、同胞同士が殺し合うことになったのである。そして、その根本原因は日本の植民地支配にあったといえるだろう。

映画のあらすじ

映画『太白山脈』は、実際に起こったことに基づいている。

物語は、朝鮮半島に共産主義国家を樹立しようとするパルチザン（共産ゲリラ）と軍・警察およびその御用団体である青年団との戦いを中心に展開する。後三者は旧来の特権階級両班（ヤンバン）と地主からなる保守層のための暴力装置である。

舞台は朝鮮半島南西端に位置する全羅南道筏橋（チョルラナムド・ポルギョ）。全羅道はもともと左翼の勢力が強いところで、金大中（キム・デジュン）元大統領もこの地の出身である。民主化運動を軍が発砲鎮圧した光州事件もこの地で起こっている。

解放された朝鮮半島では、北にソ連が推す金日成（キム・イルソン）主席の朝鮮民主主義人民共和国が、南では米国を後ろ盾に李承晩（イ・スンマン）を大統領とする大韓民国が誕生する。光復三年後の一九四八年のことである。

この年に済州島（チェジュド）で左翼の四・三蜂起事件が起こり、その鎮圧を命じられた陸軍第一四連隊が、主義主張を同じくする同胞を殺すことをよしとせず、全羅南道麗水（ヨス）と順天（スンチョン）で命令を拒否して叛乱を起こす。当時韓国には共産主義政党の南朝鮮労働党があり、軍内部にも大きな影響力を持っていた。第一四連隊には、のちに大統領となる朴正熙（パク・チョンヒ）もいたが、政府軍に制圧されたのち無期懲役に処せられている。

映画はこの激動の年を起点に、地主と小作人の争い、パルチザンと軍・警察・青年団との戦いを描き、米軍の介入によりパルチザンと北朝鮮人民軍が敗走するところで終わっている。ストーリーは人間関係の展開が中心で、登場す

る人たちを突き動かす歴史的背景や思想にはほとんど触れていない。

安聖基（アン・ソング）の演ずる金範佑（キム・ボム）は中立の傍観者として描かれ、金明坤（キム・ミョンゴン）の演ずるパルチザン指導者廉相鎮（ヨム・サンジン）は最後に自身の主義主張に根本的な疑問をいだく。

林監督の立ち位置は左右のほぼ中ほどで、少なくとも左寄りではない。この中途半端な撮影姿勢は、一九九三年二月に金泳三（キム・ヨンサム）が大統領に就任するまで、軍出身の盧泰愚（ノ・テウ）が大統領であったことと関係しているのかもしれない。

太白山脈は北朝鮮から韓国南端にかけて朝鮮半島の東側を縦貫する長さ六百キロの背骨のような山脈である。題名に朝鮮の背骨の名を冠したこの映画で、林監督が表現したかったことは何だったのか。おそらく、それは民族の自立と南北統一への期待だったろう。そう思わせるほどに、この映画は政治的な雰囲気を持っているが、撮られた映像はもっぱらうごめく人間像の羅列であり、突き刺さるような主張は伝わってこない。

制作当時の政治状況がそれを許さなかったのであろうか。

小説「太白山脈」

そこで原作を読んでみた。これは一大叙事詩といっても過言ではない壮大な大河小説である。全羅南道出身の趙廷來（チヨ・ジョンネ）が一九八三年から八九年にかけて発表したもので、日本語訳は二〇〇〇年にホーム社が発行、集英社が発売している。一卷が四百ページを超え、全十巻。四千数百ページの大歴史絵巻である。私は日本語版を市立図書館で借り、二か月かけて読了した。

原作は映画をはるかにしのぐ優れた文学作品である。ストーリー展開の面白さ、それぞれに個性のある登場人物の性格の掘り下げかた、時代背景の把握の正確さと深さ、アメリカヤソ連、それに中国の立場や利害関係に関する洞察は、作者が並外れた才能の持ち主であることを物語っている。

作者はパルチザンに強い思い入れがあり、一貫して反李承晩、反地主、反資本主義、反日、反米の立場を貫いている。しかしながら、教条主義的あるいは教科書的な左翼ではなく、常に貧しい人たち、虐げられた人たちに心を込めて寄り添っている。それにしても、この小説の書かれたのは、大統領が全斗煥（チヨン・ドウファン）、盧泰愚と続く軍事政権の時代で、一九八〇年の光州事件のほとぼりも冷

め切っていなかったことを考えると、趙廷來の腹の座りかたは尋常でない。

映画では中立的に描かれている金範佑であるが、小説では傍観者ではなく、北朝鮮人民軍に加わり米軍と戦って捕虜になるくらい左翼であり、廉相鎮は自ら信ずるところに従って最後まで戦い、爆死してその首を筏橋の広場にさらされる。最終章に至るまで趙廷來の筆致は凄まじく、衰えを見せない。

小説は編年体で書かれ、しかも歴史的事実の中で登場人物が躍動するので、うっかりすると描かれた状況すべてが事実であるかのように誤解してしまう。これは危険なことだ。この作品は韓国で五百万部売れ、借りて読んだ人を含めるとおそらく二千万人が読んだとされている。作者は博識である上に物事を深く考えて本質を掴む能力にたけているし、物事を説明し説得する能力にも秀でてい

る。そんなわけで、この作品を読んだ人たちは、事実でないことを事実と思い込んでしまった可能性が高い。たとえば植民地時代に、「女子挺身隊の名で、従軍慰安婦として送られた娘たちは、一日に二、三十人の男に犯され、あげくの果てに妊娠させられたり、性病に罹れば情け容赦なくジャングルの中に置き去りにされたりした」とのくだりがある。

しかしながら、「女子挺身隊」とは、太平洋戦争末期の労働力不足を補うために、主として日本国内において一二歳から四〇歳までの女性を勤労働員したもので、従軍慰安婦とは何の関係もない。それに、従軍慰安婦の仕事は軍の設けた区画で、委託された業者のおこなう商業的売春に従事することであり、ゴム製避妊具による性病と妊娠の予防は徹底していた。したがって、趙廷來の書いたことは事実ではない。彼の記述内容は根拠のない思い込みに基づくが、読者に間違いを信じ込ませるのは、意図的でないにせよ、我々日本人にとって迷惑な話である。この小説には、このような事実誤認がいくつもあり、それを知らずにこの作品を読んだ韓国の読者が強い反日感情を抱くのは残念なことである。

また趙廷來は公開の場所で、日帝は韓国人数百万人を虐殺した、とも述べているが、その根拠を示していない。なお、この作家は文在寅政権に近い非妥協的な左翼であり、北朝鮮で金正日（キム・ジョンイル）と笑顔で握手している写真まで存在する。

韓国の教科書を読む

韓国旅行というところ、日本では多くの人がソウル見物のこ

とだと思っている。極端な場合、ロッテ・デパートに行つて化粧品を買い、明洞（ミョンドン）で焼き肉を食べて帰つて来るだけという人もいる。景福宮（キョンボックン）すら見に行かないのだ。

韓国を高速バスで移動して風物を見て回り、地方の名物料理を食べ、博物館の説明書きから情報を得ようと思つたら、どうしてもハングルが読めなければならぬ。韓国語の構造は日本語のそれと類似しているので、文字さえ覚えれば理解はむずかしくない。ハングルは表音文字で、母音は二一、子音は一九しかなく、それらを覚えて組み合わせれば、韓国語のすべての音を表記できる。だから一週間もあれば、意味は分からずとも、音読はできるようになる。しかも、日本語と共通の漢字語が多いので、話すのはとてもかく、要領をのみ込めば読み書きにそう苦労はしない。

東京の水道橋に高麗書林という韓国書籍専門店があり、たいていの本はそこで手にはいる。小学校の国語教科書、高校の歴史や地理の教科書、大韓航空爆破事件の金賢姫（キム・ヒョニ）の自伝やいくつかの辞書を私はそこで購入した。

教科書を開いて驚くのは、反日教育の凄まじさである。

小学校四年生の国語教科書冒頭の読み物が、一九一九年の

三・一運動で日本の官憲に捕らえられ、ソウルの西大門刑務所において一八歳で獄死した柳寛順（ユ・グアンスン）の物語なのだ。さらに数ページめくると、ユン・ボンギル少年の反日行動の逸話である。教科書から「大韓独立万歳」の声が湧きあがってくる。なお、柳寛順の生家はソウルの南方百キロ余りのところにあり、すぐ近くの天安（チョナン）には、広大な敷地を有する独立記念館がある。そこには日帝の暴虐を蠟人形で表現した展示物が並んでいて、韓国人の恨みの深さを推し量ることができる。

高校の歴史教科書を開いてみよう。

何と、近現代史が三分の二を占め、その大部分のページに日帝が登場する。日本では見慣れない「侵奪」という言葉が頻繁に使われ、日本がいかに貪欲に朝鮮を収奪したかがこれでもかと言わんばかりに羅列してある。徴用工や従軍慰安婦の写真も朝鮮人虐待の証拠として掲載されている。幼少時から高校卒業まで一〇年近くの間、日帝が不平等条約を押しつけた、王妃を殺害した、朝鮮を植民地化した、日本名を強制した、土地を奪った、徴用工として強制労働させた、少女をだまして従軍慰安婦にした、等を解放後七六年間にわたって刷り込めば、韓国人の全てが「日本人は悪辣である」との先入観を持つにいたるだろう。

このように、近現代史における日本批判は痛烈だが、古代史については欠落がある。六世紀まで朝鮮半島南端にあったとされる任那の日本府についての記載は全くなく、大和朝廷が百濟を助けるべく援軍を送り、六六三年に唐・新羅連合軍に敗れた白村江の戦いについても一切触れられていない。これらは日本書紀には記されているものの、韓国では文章化された資料が存在しないため省かれているのであろう。韓国人は日本書紀なんぞ意地でも参照したくないのではないか。

李栄薫（イ・ヨンフン）編著「反日種族主義」

二〇一九年一月に、文芸春秋社から、これまでに類を見ないような本が出版された。「反日種族主義―日韓危機の根源」である。

韓国の学者たちが、定説となっている日帝の加害行為を一つひとつ根拠を挙げて虚偽と論証し、これらを韓国人による捏造と断定したのである。「韓国は嘘と詐欺に満ちている。歴史に嘘をつくことはできない」というのが彼らの主張である。この本を読んで快哉を叫んだ日本人は少なくともかろう。私もその一人だ。

著者らは植民地時代に強制徴用はなかったし、日本人と

朝鮮人との間に賃金格差もなかった、朝鮮人労働者は高賃金を求めて日本に渡ったのだ、等を当時の賃金台帳まで引用して証明した。

また、従軍慰安婦は性奴隷ではなく、職業的娼婦であった。彼女たちは主として朝鮮人の斡旋業者の手引きで日本軍の駐屯地に行き、あてがわれた個室で仕事をした。避妊・性病予防の管理は厳しかった。収入はかなり多く、業者に前借金を返済し契約期間が満了していれば自由に離職できたので、帰国した女性も多い、等と述べている。なお、日本軍による慰安婦狩りという流言は、日本人ジャーナリスト吉田清治が売名のために書いた著作が発端になっている、この著作は虚偽である、と認めている。韓国には正義連（日本軍性奴隷制問題解決のための正義記憶連帯）という組織があり、これはもともと挺対協（韓国挺身隊問題対策協議会）という団体であったが、挺身隊が慰安婦と何の関係もないということが分かってから名称を変更したものである。この正義連は毎週水曜日に日本大使館前で抗議集会を開く。大使館前の車道にはバス型の警察車両がずらりと並び、暴徒の館内への侵入を防いでいる。車道を隔てた正面には慰安婦の少女像が鎮座している。警官が常に警備してはいるが、私が「像の写真を撮りますよ」と断わると、「はい」と

言って何の文句もつけなかった。

著者らは、高校の歴史教科書掲載の「北海道開拓事業に強制徴用された朝鮮人土木労働者」と説明の付いている瘦せた裸の十人の男性の写真は、一九二六年の旭川新聞に載った日本人労働者の写真である、とネタを割っている。そのせいか、私が新たに購入した二〇二〇年三月発行の「高等学校韓国史」という教科書には、この写真は出ていない。

なお李栄薫は「太白山脈」の著者趙廷來を「狂気がかった憎悪の歴史小説家」と定義づけている。趙が別の著作「アリラン」で、日本人警察官が土地調査事業に抵抗した朝鮮人を裁判なしで木に縛りつけて銃殺したとか、千島列島で日本軍が一〇〇〇人の朝鮮人労働者を三〇分かけて機関銃で皆殺しにしたとか、ありえない話をでっち上げ、人々に誤った知識を植えつけているというのだ。趙は説得力のある書き手なので、これらのエピソードを事実と捉える読者は多いと思われる。

ざっと見て、「反日種族主義」はこのような内容の著作なので、当然のことながら、日帝の蛮行の数々を事実と刷り込まれた韓国人は猛然と反発した。著者らは「売国奴」とのしられ、テレビやYouTubeで間違っている、事実を知らないと攻撃されている。

私が日本にいる韓国人の知り合いに「あの本は画期的だ、素晴らしい」と言ったところ、「あの人たちは間違っている。事実を捻じ曲げている。日本からカネをもらってあの本を書いたのだ」と激しく反発した。そのあげく、韓国で流されている反李榮薫のユーチューブを何本も送りつけてきた。私が「あなたはあの本を読んで批判しているのですか。読まないで非難することは許されません」と反論すると、彼女は黙ってしまった。それほどに、教科書による刷り込みは強いのだ。韓国人全体が洗脳されているといっても過言ではない。

「恨」(ハン)の正体

冒頭で私は、韓国人は日本に対して特殊な感情「恨」をいだいているようだと書いた。

趙廷來は「太白山脈」第七巻で「恨」について次のように述べている。恨は「怒りと悔しさと怨恨が積もり積もった感情」「抑圧され搾取されて生きてきた人々の体験と精神の凝縮」「支配されてきた者同士にのみ通じる思想」であり、「歴史の転換点における起動力」として、東学農民蜂起の起爆剤になった、と。

林權澤監督は『太白山脈』を撮る少し前の一九九三年に

『風の丘を越えて―西便制(ソピョンジエ)』という作品を世に出している。この映画はソウルだけでも百万人以上が観たという話題作で、韓国の伝統芸能パンソリを唄う親子をテーマにした切々たる物語である。金明坤が父親を演じ、『太白山脈』で巫堂素花(ソファ)を演じた呉貞孩(オ・ジョンヘ)が娘役である。李清俊(イ・チョンジュン)の短編集「南道の人」1「西便制」がその原作である。娘の唄に「恨」が込められていないとの思いから、父親は娘の目に塩酸を流し込んで失明させる。眼が見えないぶん唄の情感が深くなるとの考えからである。この短編小説を翻訳したのは根本理恵氏であるが、同氏はこの映画の字幕も担当していて、「恨」を「情念」と訳している。なるほど、と唸らせる訳である。

「恨」は日本語にない概念であるが、要するに語り継ぎ言い継がれてきた深い感情と理解でききそうである。その深い感情とは、無断ではいつてきて刀を突きつけ、国ごと強奪していった日本に対する恨み、つらみ、怒りが心の深いところに沈殿したものである。それを、韓国は教育という形で幼少時から何年もかけて国民の心に刷り込んでいるのだ。となると、これは心に押された焼き印のようなもので、一生消えることがないだろう。

趙容弼（チョ・ヨンピル）の歌に「恨五百年」（ハノベンニヨン）というのがある。これはまさに心に突き刺さる絶唱である。しかしこの「恨」がこの先五百年も続くのであれば、日韓関係は半永久的に悪化したままであろう。

韓国人には悪いが、「恨」とは、過去において日本にやられたつばなしであったという被害者意識がもとなった自虐思想ではなからうか。「恨」が先祖代々続く記憶などということは生物学的にありえない。人間の記憶は一代限りである。したがって、現代の「恨」は教育における刷り込みがもたらした情念といえよう。

韓国は今や発展した先進国である。両国政府の合意のもとに解決された問題を蒸し返し、何度も謝罪と賠償を求めることは国際法上も認められることではない。今後も同様の事態が続くならば、日本は韓国との断交も含めて対応を考えるべきではないか。

『主戦場』

村上 暁 スタッフ

2019年 アメリカ 122分

監督・脚本・撮影・編集・ナレーション ミキ・デザキ

慰安婦問題についての論争を取り上げたドキュメンタリー映画。ミキ・デザキ監督は日系アメリカ人2世でYouTuber。元朝日新聞記者の植村隆さんが、「ネットウヨ」と呼ばれる人たちから中傷されているというニュースを聞いたことがきっかけで、慰安婦問題に関心を持ったとのこと。アメリカでは、「第二次世界大戦時の日本軍が多くの女性たちを従軍慰安婦として性奴隷にしていた」ということが事実として認識されているのに、日本国内では、そのことを否定する人々がいる。どのような論争が起きているのか、否定派、肯定派それぞれの主張を並べることによって、この問題について考えたいという意図でこの映画は作られた。当事者国である日本・韓国ではなく、アメリカで作られた「慰安婦問題のドキュメンタリー」という珍しさと、インパクトのある予告編で、この映画は大きな話題となっていた。平日昼間にもかかわらず、客席は満員だった。

慰安婦の数、日本軍の主導性、売春なのか奴隷なのかな

ど、様々な観点から否定、肯定両派からの主張を見ることが出来る。双方とも、インタビュウのカメラを通して自分の説が正しいことを主張する。その懸命な姿の中に、話をしている人の人柄がにじみ出てくる。

慰安婦問題はなかったと主張する、右派の有名人たちが多数出演している。彼らは、最初は余裕の表情で語っていたが、後半になると差別主義的発言が多くあらわれる。「フェミニズムを始めたのはブサイク」「朝鮮は平気で嘘をつく民族。騙した方より騙される方が悪いという教育を受けている」等、おぞましい発言が次々に発せられ、本性が現れる。「他人が書いた慰安婦問題の著作は読まない」と断言する否定派の歴史家が登場した時や、「日本軍はこんなことしないと直感で分かった」と自己の直感が正しさの根拠のよりに発言する女性が登場した時は、劇場に大きな笑いが起こった。

対して肯定派は、これまで積み上げられてきた研究に基づき淡々と語る。慰安婦の人数について語ることに慎重であることや、強制連行・性奴隷という言葉の解釈についての国際的な基準での定義など、理性的に説明していた。映画が終わる頃には、どの人の意見が信用できるか、自分なりの答えが出てきた気がした。

吉見義明著「買春する帝国」

慰安婦問題について考えるとき、日本における「公娼制」を知ることが大切であると感じた。映画公開後まもなく刊行された「買春する帝国」は、映画にも登場していた中央大学教授の吉見義明氏の著作。19世紀後半から第二次世界大戦後までの、日本の性売買の実態について詳しく記載されている。

明治維新後、近代国家を目指す日本は、性売買は不道德であるという新たな認識を持たざるを得なくなった。1872年、性売を生業とする娼妓・芸妓などの人身売買を禁止する娼妓解放令が出された。しかし、明治政府は性売買を禁止せず、遊女屋を貸座敷業者とし、遊女は性売買のために座敷を借りて営業するという形に変えただけだった。実質的には貧しい世帯に前借金を貸し付け、その返済のために若い娘に性売をさせることが公権力によって公認された。明治政府の「公娼制」誕生である。

日清・日露戦争による軍備拡張で各地に連隊が新設されると、それに伴い遊郭も新設、拡大された。海外派兵に伴い、大陸にも遊郭が拡大していった。遊郭の存在は兵士の不満解消、性病感染防止のためとして軍隊に欠かせないものとされていた。2016年に公開され大ヒットとなった、

片渕須直監督のアニメ映画『この世界の片隅に』には、呉の朝日遊郭が登場する。軍人を主な顧客とする性売買市場であり、この時期に大発展した。

1900年、内務省は全国的な規定である娼妓取締規則を出した。娼妓は警察官署に保管される娼妓名簿に登録され、貸座敷指定地以外に住んではならないとされ、外出は警察官署の許可が必要とされた。居住の自由と外出の自由が法令により奪われたのだ。客を選択または拒否する権利は保証されていなかった。客に梅毒等の性病をうつさないため、健康診断の義務が課された。

韓国併合6年後の1916年、朝鮮総督府により朝鮮全土に共通する統一的な貸座敷娼妓取締規則が制定された。規則を作成した朝鮮総督府警務総長は、直後に朝鮮に駐留する師団の長になっている。陸軍の意志で公娼制が朝鮮全土で展開されることになった。内容は、国内で出されている娼妓取締規則よりもさらに女性の人権を侵害する内容となっており、年齢は17歳以上(内地は18歳以上)、内地では禁止されている一部の張店や自由廃業・通信などの妨害が禁止されていなかった。

第一次世界大戦後、国際的には女性の人権を守る意識が高まっていた。1920年にできた国際連盟に加盟したこ

とで、日本政府は「公娼制」が女性を性奴隷にしている問題点について認識していた。1929年には衆議院に「公娼制度廃止に関する法律案」が上程されたが否決。1930年には、神奈川県会が廃娼意見書を満場一致で可決している。「公娼制度は人身売買と自由拘束の二大罪悪を内容とする事実上の奴隷制度」という文言が入っていた。

1933年には成年女性取引禁止に関する国際条約が調印された。他人の情欲を満足させるために他国での性売買を目的として成年の女性を勧誘・誘引または拐去したものは、女性の承諾を得た場合でも処罰されなければならないという内容。これに署名していれば、日本からの慰安婦送出や朝鮮、台湾、中国からの慰安婦送出はできなかつたはずだが、日本は署名をしなかつた。

1938年、軍専属の性売買所「特殊慰安所」を軍が管理することが決定された。前借金や年季での拘束、梅毒検査の強制、選客の自由がなく、性売を拒否することができない、居住の自由がないなど女性の基本的な人権侵害を軍の管理下で行っていた。

「公娼制」が女性を「性奴隷」とする。そのことは、国際社会だけでなく、日本でも十分認識されていた。それでも日本軍は、軍人たちの意馬心猿のため慰安所を作り続け

た。国際条約の内容に反し、日本人女性だけでなく海外の女性までも慰安所へ送り込んでいた。日本軍は、公娼制を利用し、女性を「性奴隷」とする「軍慰安所」を作り運営していた。

李栄薫（イ・ヨンフン）編著「反日種族主義」

同じく2019年に刊行された、複数の韓国人学者による著作。プロローグを見て驚いた。「嘘をつく国民」と題し、「韓国の嘘つき文化は国際的に広く知れ渡っています。」という文章で始まっている。『主戦場』で「朝鮮は平気で嘘をつく民族」と言っている人がいたが、それと同じことがプロローグで記載されている。韓国では偽証罪や詐欺事件が多い等の理由が書かれているが、国によって刑法その他の仕組みが違うのに、その多寡をもって韓国を「嘘つき文化」と表現するのは明らかにヘイトだ。この時点でかなり読む気をそがれたが、せっかく買ったのだから勿体ないと貧乏根性を出して読み進める。「嘘をつく国民」の次は「嘘をつく政府」。これはありそうだ。韓国の政治事情は分からないけど、今の日本は自信をもって「嘘をつく政府」ですと主張できるだろう。

第3部の「公娼制の成立と文化」に、日本軍の慰安婦に

ついでに記述がある。「日本軍慰安婦問題の真実」の項の著者李栄薫氏は、日本の「公娼制」が韓国に移植されたことを認めている。「日本軍は軍の付属施設として慰安所を設置」「公娼制そのものが最初から軍慰安所の性格を持っていた」「慰安所の運営は軍の細かい統制下にあった」「月2回の休日以外は外出できない」等々。さらに「韓日関係が破綻するまで」の項の著者朱益鐘氏は、「多くが貧困にあえぎ人権意識が薄弱なところではどこでも性奴隷が蔓延。問題は一国の政府が、その軍隊が慰安婦を戦争遂行機構の一部として活用したところにある」とズバリ書いている。なーんだ、この本の著者たちは、日本軍が性奴隷を扱っていたことを認めているじゃないかと思いきや、「日本軍には責任がない」らしい。なぜそのような結論が出るのか。

映画にも頻出していた「性奴隷でなく売春婦である」という理論。貧困層のもとへ「斡旋業者が来て甘言利説で説得し、若干の前借金を提示すれば娘の就業承諾をした。娘は泣きながら斡旋業者に連れていかれた。」としても、「実態はともかく形式的には商業的契約」という著者の認識には、性売をさせられる女性の人権について全く考慮がされていない。

「少女を待っていたのは従軍慰安所。無慈悲な家父長の暴

力が新女性としての自我実現を夢見た一人の少女を慰安婦にした原因」「それはその時代の制度であり文化」という認識。つまり、制度であり文化であったなら、日本軍がそれに乗っかって少女を性奴隷にしても責任はないという認識なのだ。

「買春する帝国」でみたとおり、明治政府は「公娼制」が女性を性奴隷にしている問題点について認識していた。それでも「制度であり文化」だから責任がないと言えるのだろうか。

『主戦場』で慰安婦問題での日本軍の責任を否定する人々にしろ、「反日種族主義」のような嫌韓本の著者たちにしろ、性売をさせられる女性の人権侵害という観点が絶望的なほどに抜け落ちている。それが典型的に出ているのが、「慰安所では避妊具の使用と、性病予防の健診が徹底していた。慰安婦たちの身体が守られるよう最大限配慮されていた」という認識だ。妊娠すれば商品価値がなくなるし、性病を軍人にうつされてはたまらないから、そのような対策がとられていた。慰安婦を守るためではない。現に、梅毒の検査を受ける義務は、慰安婦たちにとって大変な心理的負担であった。「女性の人権」という観点が抜け落ちている現状は、日本の今の姿をよく表している。

『海を渡る「慰安婦」問題』

2006年発足の第一次安倍政権は、中学の教科書から「慰安婦問題」を削除した。2012年発足の第二次安倍政権は、「河野談話」見直しを公約とした。この政権の下、日本軍が第二次世界大戦で犯した戦争犯罪を隠そうとする歴史修正主義者たちの動きが活発化。日本国内だけでなく、海外でもこれまでの歴史修正主義のメッセージを発信する活動が起こっている。

本書は、国内・海外在住の研究者4人が、日本の右派、政府による歴史修正史観を広める活動について研究したものである。時の政府による歴史認識の捻じ曲げと、それに乗る人々。彼らの発するメッセージが、いかに海外の信用を無くしているか、如実に語られている。

第2章の著者である小山エミ氏は、日本出身で10代から20年以上アメリカに在住しているとのこと。この章では、アメリカにおける「慰安婦」碑設置への歴史修正主義者の攻撃について記載されている。第二次世界大戦時に行われた日本軍によるひどい人権侵害を反省し、同じ過ちを繰り返さないという思いを込めて、アメリカ各地に設置される慰安婦碑。歴史修正主義者は、この慰安婦碑の設置を阻止するため、「慰安婦碑が建てられたせいで、日本人の子

どもがいじめを受けるケースが多発している」という主張をした。現地の小山氏は、そのようないじめが起きていたら大変なことだと感じ、警察・学校・教育委員会等様々な機関に問い合わせたが、何の相談も通報も報告されていなかった。日本から保守系国会議員が現地を訪ね、いじめ被害者の保護者に面会しようとしたが、結局見つけられなかった。在米の日本大使館や領事館は、HPに「いやがらせ被害の情報提供呼びかけ」を記載したが、その後の東京新聞の取材に対し、外務省は具体的な被害は把握していないとしている。つまり、「慰安婦碑のせいで日本人がいじめられている」ということ自体がデマであったということだ。

第3章では、イギリス生まれの歴史学者テッサ・モーリス・スズキ氏により、海外への歴史修正主義メッセージの発信について述べられている。自民党の国会議員が、歴史的資料に基づかない歴史修正主義の書籍をアメリカの歴史学者やジャーナリストへ送付。自民党と安倍政権のプロパガンダであることが明らかで学術的価値はなく、その差別と偏見にまみれた内容にあきられている。公職選挙法違反の罪で絶賛裁判中の河井克行被告は、第三次安倍改造内閣時に首相補佐官として訪米した際に、2冊の歴史修正主義本を議会関係者に配り、失笑を買ったということだ。

日本国内では、長く続いた安倍政権による歴史修正主義の洗脳がある程度功を奏しており、いわゆる嫌韓本がよく売れているが、海外では全く通用していないということがよくわかる。

歴史修正主義者たちのみっともない振る舞いは、日本でも頻繁に見ることができている。「あいちトリエンナーレ2019」の「表現の不自由展・その後」に、「平和の少女像」が展示されたことによる騒動。慰安婦問題否定派からの脅迫が相次ぎ、一時展示が中止になってしまった。その後、名古屋市長や高須クリニック院長が中心となり、大村知事の責任を問うとしてリコール運動が始まったが、なんと集められた署名のほとんどが偽造であったという事件が発覚。これでもかというほど、国内・海外で恥を振りまき続けている。

歴史修正主義者たちが好きなフレーズ「美しい国、日本」。彼らがシャカリキになって頑張れば頑張るほど「醜い国、日本」になっていることに気付かないのだろうか。過去の過ちを認め、同じ過ちを繰り返さないように記憶すること。これこそが、「美しい国」だけでなく、「美しい世界」を作るのに必要なことだと思う。

『はじまりへの旅』

旧作レンタル ときどき映画館

2016年 米国 118分

監督 マット・ロス

出演 ヴィゴ・モーテンセン

「賢者の生き方は、時に愚者の行動にも見える。」

この言葉は、かの有名なあの映画監督の言葉だといえ、ぐっと構えるものだが、残念、私が適当に考えたものだ。この映画に送りたいのが為に。しかし、名言とはきつとどこかで誰かも同じ様なことを言っているのだ。たまたまそれが成功者だったかそうじゃなかったかに過ぎない。大事なことは、それが本人にとって正しいかどうかという事だ。そう、正しいという事はなんだろうか。最近は何にそのことを考えている。

年を重ねれば、この先、人生どのように生きていくのか考えるようになる。自分がどのように生きてきたのか、この先どのように生きていかなければいけないのか、今更ながら、その答えを求めて探している。

子供の頃は、先人の名言なんてものは、常識の範疇にあるお説教に過ぎないと感じていたが、今は身に染みて、守

っておけば良かったなと思う事もある。そんな日々だ。

そんな日々を繰り返していく中で、趣味として鑑賞している映画の中に、人生の答えを教えてくれるような、そんな映画が誰にも一つや二つあるはずだろう。私はそれが一つ見つかったのだ。それがこの『はじまりへの旅』である。

すこぶる前振りが長くなったが、この映画はれっきとした思想で成り立っている。しかしちゃんとした面白い物語でもあるため、勇気をもって人にお薦めしたい。なんとなく個人的に好きで、濡れ場がよかったから薦めるとか、税金も払っていないような行く当ても分からない男女関係の内容の映画を「美しい」とか、好きな俳優の「演技がいい」とか、マイナーな映画だから深いとか、鬼滅の刃はアニメだから観に行かない、とか言っつて片付けるものでは決しない。

ノームチョムスキーという哲学者の思想を元に、人々を幸せにするために、生き方を考えさせるために作られている。今の社会問題にも触れており、なんとなく学校に行くだけの子供たちや、一日中ネットを見ながら消費する大人たちには是非見てほしい。資本主義に洗脳された人間や頭の固い人には理解できはしないかもしれない。なぜなら見方によっては、宗教染みた内容と捉えがちだからだ。しかし

それも一つの正しい答えだ。

正しい生き方とはなんだろうか、人間ドラマを通じて映画の伝えたいメッセージを受け取ってもらいたい。メインテーマは家族愛であり、ヒューマンドラマの部類だと思われる。(なぜかレンタル屋の項目欄はコメディの部類になっているので注意だ)

もう一つのテーマは「言葉ではなく、行動すること」である。それは誰にでも分かっていることなのだが、簡単にできるものではない。難しいことだが、偏見を捨てているんなことに挑戦する事が大事だ。同じ様なジャンルばかりの映画を観るのではなく、たまには『テネット』を見るとかね。(理解できなかつたけど)と、えらく壮大な内容と思わせるが、やはり映画なんてものは2時間で終わってしまう。この映画は十分満足したのだが、人生の答えの全てではなかつた。

ふと思う。昔よく聴いた思い出の音楽を、今も聴くたびに、「この音楽さえあれば生きていける」と思ってしまうあの現象と同じだ。やはりいつまでも答えを探し続ける、この先も様々な映画を見続けるのだ。

オールタイム映画ベスト3 岩崎 久美子 映画ファン

洋画①いまを生きる (ピーター・ウイアー) 1989年 米国

②風と共に去りぬ (ヴィクター・フレミング) 1939年 米国

③ガタカ (アンドリュース・ニコル) 1997年 米国

邦画①ハル (森田芳光) 1996年

②日日は好日 (大森立嗣) 2018年

③青の炎 (蟠川幸雄) 2003年

昨年はなかなか映画館に行けなかったので2020年では選出出来ず、これまでのベスト3を考えてみた。好きな映画はたくさん有るが、ベスト3を決めるのは難しい。「いまを生きる」は今まで一番良かった映画を聞くと、挙げる方も多い。制約のある青春の中、最後の場面は圧巻だった。

「風と共に去りぬ」はやはりスカーレットの逞しさと演じるヴィヴィアン・リーの美しさが印象的。4時間もあつという間だ。「ガタカ」は遺伝子操作される世界での差別を描いているが、逆に人間的な感情を感じさせる。何気なく観て感動した。

邦画は洋画を選ぶのとはまた違う感じがするが、共感出

来る作品にした。「ハル」は若き内野聖陽の懐かしいパソコン通信の話。微笑ましい恋愛が良かった。「日日は好日」は原作を読んでの鑑賞だが、忠実に映像化されていて主人公の黒木華もピッタリだった。「青の炎」も小説が好きで観た。拙い犯罪が伝えるものが有ると思う。

今年は公開される作品をたくさん観て、ぜひ2021年のベストを選んでみたいと思う。

ポルノ

『罪と女王』

豊楽志夫 ブラックシープ

2019年 デンマーク・スウェーデン 127分

監督 メイ・エル・トーカー

出演 トリーヌ・ティルホム、グスタフ・リン

ポルノではなくヒューマンドラマだ、いやサスペンスドラマだと言う人もいるだろう。オイラはあえてポルノという世界でとらえてみた。デンマークという国は、女性上位の国と聞いているが、ここまでやるのか、映画とはいえその猛々しい行動に頭がくらくらした。

児童問題を扱う優秀なデンマークの中年女性弁護士のアンネ。彼女には再婚相手の医師のペーターがいる。その夫の前妻との間の17歳の息子がスウェーデンの学校で問題を起こし退学となり、引き取ることになる。その少年は、やって来るや、勝手気ままに振る舞い、馴れてくると女友達を連れ込み自室でよろしくやるようになる。

夫がいないある夜、アンネは少年の若いしなやかな肉体に惹かれ、欲情を抑えきれなくなる。そして、その少年の

部屋へ忍び込み、寝ている彼の〇〇〇に触り反応を見る。少年はびっくりして気付くが、血気盛んな年頃すぐ〇〇してくる。それを見て彼女はフェラに移り、頃はよしと見ると、四つん這いになり少年を誘う。彼は背後から彼女に乗っかかっていく。

彼は女友達とのありきたりのセックスとは違う世界に興奮する。それからというものは、同じ屋根の下で夫がいない時や、我慢できない時は外に連れ出して猛々しいセックスを重ねる。いろんな男性経験を持つ彼女は常に少年をリードし翻弄していく。

とにかくすごい映画にオイラは息を呑む。2人の最初のセックスも、いきなりフェラ、バックで始まり、クニニリングス等エスカレートしていくのだ。

アンネは一見知的な女だが、超肉食系。老いてなお性に執着する姿を鬼気迫る演技で見せる。このアンネ役は、デンマークでは知られた女優で、ベルリン映画祭で女優賞も取ったこともあるという国際的スター。今年で48歳という。フルヌードを見せるが、オッパイは少々垂れ、皮膚はところどころシミが出ている。日本人が見れば裸映画ではちよつと通用しない年齢だ。しかし、そんなことはお構い

なしに全部見せる。衝撃的ですからある。2人はどんどんエスカレートしていく。残念なのは、殆どのからみシーンで野暮なボカシが入っていることだ。引きで撮っているシーンはボカシが大きく画面を占め興ざめだ。

同じ屋根の下の情事がいつまでも続くわけがなく、ある夜、親族が集まったパーティで身内の一人に気づかれてしまう。彼女はこれが潮時と考え、付きまとう少年を突き放し別れようとする。突然冷たくなった彼女に納得のいかない少年は、問い詰められるまま父親（彼女の夫）に、その関係をバラしてしまう。

その後、夫を入れ3人で話を持つが、アンネは少年の話を頑として否定、事実として受け入れようとしなない。女の開き直りがすごい。徹底的に白を切る。「2人のセックス場面は誰にも見られていない。身内に見られたのは少年が自分じゃやれているところだけだ。だから、その事実は誰にもわからない」。アンネは自分の地位と家庭を維持するために、強引にウソを貫いて行く。

少年はウソを平然と通すアンネを目の当たりにして、愕然とする。あんなに抱き合った中なのにその女が分からなくなる。夫が疑いの目を向けると、彼女は全然聞き入れず

荷物をまとめて出て行ってしまおう。玄関先の捨てゼリフにびっくり仰天「2、3日家を空けてるから、その間に出て行ってちょうだい!」・・・男にはまねのできない言いがかりだ。そんな理不尽な展開にオイラは衝撃を受ける。ラストの悲劇的な結末は、ポルノの世界など、ぶっ飛ばす展開だが・・・男と女の関係は年齢に関係なく、なんと厄介なんだろう。

この映画デンマークで高い評価を受け多くの賞に輝いている。2019年度の北欧の代表作とも言われている。日本の女優でアンネをやる女優はいるだろうか？